毎日歌壇

水原紫苑 選

木を切って高層ビルを建てんとする国に増え続ける樹木葬　京都市　小池ひろみ

△評▽人の魂がいつにも増して木の魂とひとつになろうとする今、木を切ることの愚かしさと残酷さ。

黒目から黒目にとどく黒だけが空のむこうにつながっている　京都市　袴田　朱夏

△評▽あまり顧みられることのない、黒という色の形而上的な強さを思う。

二千年くらい雨でもかまわない燃える石から海になりたい　横浜市　瀬生ゆう子

文字盤も針も見えない透明な時計がこの空に隠れてた　横浜市　友常　甘酢

束の間の雨が降るたび生きかえる花の名前を教えてほしい　さいたま市　雨谷　詩穂

晩秋の、ギリシャ神話の影響を受けたみたいな嫉妬の汀　横浜市　永永　キヌ

わたくしの嵐が丘を生きてゆく被害と加害を行き来しながら　宮古島市　塩見　佯

窓といういくつもの眼を灼き尽くす夕陽がとけた刹那失明　東京　石川　真琴

彫刻は動き出さぬということを静かに告げる秋の夜の月　宇治市　黒野　れお

秋祭りの太鼓過ぎゆくほの昏き夢へ戻ろうとする意識を　三鷹市　菅原　海春

伊藤一彦 選

タッチパネ感覚のわが指先は公衆電話のボタンが重い　札幌市　佐藤　学

△評▽公衆電話自体が古いものになりつつあるが、そのボタンを重く感じるという指摘にタッチパネルが当たり前の今を歌う。

かたむけば見えぬ分銅おく日々よ勇ましきことばかり語りて　東京　富見井高志

△評▽自分の言動にバランスを考える作者。心の「分銅」の比喩が巧みで面白い。

反対の道を選べばあるはずの世界のわたしが車窓に映る　ふじみ野市　雨雨雨汰

何もない荒地に見えて鳩の楽園だったりするこの世の中は　横浜市　砂月　七

虹を見た最初のヒトの驚きが一〇〇万年後の吾に甦える　取手市　崩　彦

空色の風、風色の水、水色の空　秋のひかり重なる　沼田市　山崎　杜人

ジャズフェスのケヤキ並木の雑踏に鰯雲見る人と別れて　仙台市　古谷　隆男

「銀色の道」口ずさめば孤独でも孤独じゃなかった　ゾウさんが逝く　池田市　黒木　淳子

東京タワーの隅っこで雨宿りする蛾と見つめ合って秋　東京　秋月　六花

品書きの月見そばからかけそばの値段を引けば月は百円　東京　石川　真琴

米川千嘉子 選

我が街と娘の住む北の地気温差が日々開きゆく秋深まりて　村上市　杉江　正子

△評▽夏の間はどちらも異様に暑かったが、秋から冬、母娘がそれぞれの寒さに隔たってゆくような寂しさがあるのだ。

手話教室今日も好きな人来ていたりその指先をじっと見ており　上越市　戸枝　誠

△評▽心ひそかに思っているのだろう。指先にその人そのものを感じようとしている。

「よそはよそ」言われた言葉繰り返す外の世界が眩しい朝は　東京　夏目　そよ

ブラインドタッチの世には死語ならむ今も残れるペン胼胝の跡　京都市　根来美知代

むらさきの友禅染をリメイクしパンツスーツに母を着て行く　鹿嶋市　大熊佳世子

仏壇の前でお寿司を分け合うて結婚記念日ひとりとなるも　大阪市　森川　慶子

保育士の合図でぱっと駆けてゆく空より青い青い帽子は　南魚沼市　木村　圭

父そっくりの冷たい人と私にいう母に私はそっくりですが　松山市　丘の紫陽花

終わらない夏を終わらせたくてする冷蔵庫の掃除スイカの種　京都市　高橋よしこ

ロボットが無言でラーメン運び来る「へい、お待ち」ぐらい言ったらどうだ　掛川市　宮川　正夫

加藤治郎 選

Smells Like Teen Spirit いまもまだ水面で揺れるあの日の花火　宮古島市　塩見　佯

△評▽カート・コバーンの名曲のタイトルを引用した。遠い花火として回想している。曲を視聴すると作品の理解は深まるだろう。

暴露するだけが正義じゃないからさ3分経ってすするヌードル　鳥取市　中之島　潤

△評▽暴露することの正義を問いかけた。皆に考えてほしい。下句の具象が巧みだ。

隣室で鳴り続けているベルがあり誰も取らずに仕事は続く　千葉市　佐藤　綾子

冬の花屋を思い出す切れそうに冷たい水と唐揚げ弁当　京都市　小川　ゆか

水色の便箋に書くもうすぐで消えてしまいそうな言葉を　堺市　初夏みどり

瞬ける赤い星座にぶらさがり上から見下ろすきょうの残り火　中国　岸　志帆莉

たいせつな自転車を売りにゆく背をみていた風のないベランダで　花巻市　永汐　れい

花火散る、ちるちるみちる青い鳥の羽が降るでしょう風下の方に　横浜市　朔月　七

父さんがリストラされた日の晩餐　縄文土器に盛られた味噌汁　東京　高田　尚宏

移乗介助為す時に我が腰やギクリと震え消えない痛み　須崎市　野中　泰佑

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます